

『古代アメリカ』 11, 2008pp. 35-46

<調査速報>

アステカ・テノチティラン主神殿出土のトルコ石の象徴性

井関 瞳美

(慶應義塾大学文学部)

1. はじめに

アステカ帝国は、後古典期後期（1325年から1521年のスペイン人による征服まで）、現在のメキシコ・シティ中心部のテスココ湖上に建設された首都テノチティランを拠点として、メキシコ北部からグアテマラにかけた広大な領域に政治的・経済的・文化的影響力を及ぼした、古代メソアメリカ史上最後の帝国である（図1、図2）。テノチティランの主神殿テンプロ・マヨールのオフレンダと呼ばれる神々への奉納品を納めた貯蔵穴からは、後古典期の中央高原文化に特有とされるトルコ石製の遺物が集中的に出土している。本稿の目的は、この主神殿出土のトルコ石の遺物に関するデータの分析と考察である。データは、2002年春と2007年夏にテンプロ・マヨール博物館で行った調査に基づく。比較データとして、2001年夏と2008年春に調査した、アメリカ・ヨーロッパの博物館とメキシコのテンプロ・マヨール博物館以外の博物館に所蔵されているメソアメリカ諸文化のトルコ石製遺物の資料も考慮していく（表1）。



図1 メソアメリカ地図
(Miller & Taube 1993: 12-3)より引用・改変

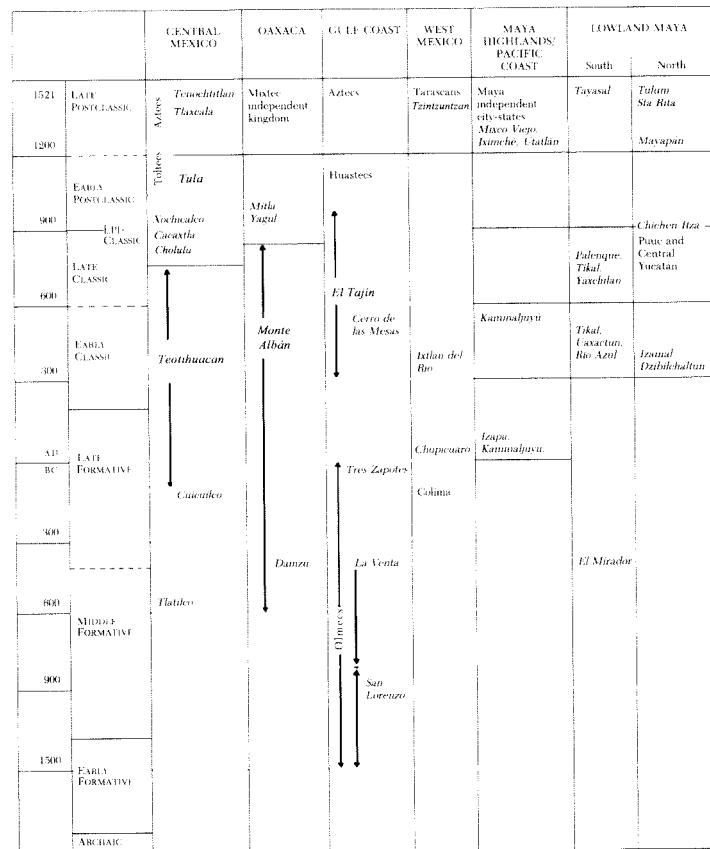


図2 メソアメリカ年表
(Miller & Taube 1993: 10)より引用・改変

MEXICO		MOSAIC													Others	Total Entries	
		Bead Ornament	Mask	Skull Mask	Shield Disk	Wooden Tablet	Knife Handle	Flint	Deity Animal Figure	Pectoral	Small Disk	Ear Ornaments	Labret	Other Mosaic Ornaments	Other Mosaic Objects		
Middle Mexico	Central Valley	Templo Mayor	2	-	-	3	-	-	12	-	-	16	-	-	-	126	165
		Tenochtitlan	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
		Aztec-Mixtec Style	-	6	2	2	-	3	-	9	2	1	-	1	-	-	26
		Toltec	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Zapotec-Mixtec	Caves	-	18	-	19	2	-	-	-	-	2	5	-	-	-	not counted	46
	Tombs of Monte Albán	55	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	35	94
	Other tombs	-	1	-	1	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	not counted	5
	Other sites	3	5	1	1	-	-	-	3	1	2	5	1	1	-	-	21
Isoy	Maya	-	2	1	4	-	-	-	1	-	4	-	-	-	4	-	16
	Guerrero	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2
West	Alta Vista	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	not counted	2
	Other Classic Sites	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	not counted	1
	Tarascan	4	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	4	2	-	not counted	12
	Total	66	33	6	31	2	3	12	11	6	22	22	4	12	5	161	396

Notes:

- 1) 165 entries of Templo Mayor Offerings include uncountable fragments.
- 2) The objects in the category of Aztec-Mixtec style are kept in the museums in Europe & USA with no information of provenance.
- 3) Caves: Acatlán, Santa Ana Teloxtoc, Tehuacán, in Puebla; Cheve, Ejutla in Oaxaca.
- 4) Other tombs: Zaachila, Cuilapan, Xoxo, Yanhuitlán, Huitzo
- 5) Other sites: Coixtlahuaca and Coxcatlán.

表1 古典期から後古典期にかけてメソアメリカ諸地域から出土したトルコ石製遺物の数

本稿では、最初に研究対象、研究テーマについて述べ、次にメソアメリカにおいてトルコ石がどのような存在であったのかを手短かにまとめていく。その上でテンプロ・マヨール出土のトルコ石がどのような意味を持っていたのかについて考察していく。

2. 研究対象と研究テーマ

アステカ帝国を築いたアステカ人またはナワ人とは、古典期末にメキシコ北部から移動して来た民族と考えられており、スペイン人到来時には中央高原の主要民族であった。「アステカ」という語は、ナワ人の伝説的故郷であるアストランにちなんで、現在の研究者がナワ人・ナワ文化につけた名称である(Evans 2008: 428)。ナワ民族の一部族であるメシーカ人は、民族移動の終末期にメキシコ高原に移動してきた人々で、1325年に現在のメキシコ・シティにテノチティランを築いた。メシーカ人を含むナワ民族の言語は、言語学的にはユト=アステカン語族に属しているナワトル語である。この語族には、現在のメキシコ北部とアメリカ合衆国南西地域すなわちコロラド州以南に広がる、一般にサウスウェストと呼ばれる文化圏で話されているピマ、タマウマラ、コラ、ウイチョルなど多くの言語が含まれる(Manrique Castañeda 1995: 199; Dakin 2001: 364)。つまりナワ民族のルーツは、もともとはメソアメリカ文化圏辺境のメキシコ北部にあり、文化的にサウスウェスト的要素の影響も受けていたということが、本稿では重要な点になってくる。

筆者の研究テーマは、ナワトル語の「シウィトル *xihuittl*」という語の觀念化の過程と、その過程においてナワ人がどのように自分たちを取り巻く歴史的・環境的背景を経験していたかについて、シウィトルに関連する4つの表現媒体から分析していくことである。シウィトルとは、16世紀に編纂されたナワトル語／スペイン語辞書では、「草、トルコ石、太陽年、彗星、貴重さ、青／緑色、火」といった現代の私達の感覚では違和感のあるカテゴリーを語義として持っている(Molina 1992: 159v; Siméon 1992: 770-1)(図3)。とくにトルコ石、太陽年、青／緑色、火といった概念は、おもにアステカ帝国の支配者層(メシーカ人)において政治・経済的、宗教的、文化的に非常に重要な要素であったと考えられる。

シウィトル觀念に関連する表現媒体として挙げられるのが、言語、図像、物質文化、儀礼の4つである。それぞれの表現媒体において、表現される意味範疇、シウィトルの意味や機能の拡大・派生形態、背景となる歴史・文化要素、消費者と消費状態など、多くの点でギャップがあり、そのギャップからシウィトル觀念の構築に貢献していた人々の経験を読み取ることができる(Izeki 2007)。たとえば言語表現の消費者はナワトル語話者全体であるが、植民地時代に編纂されたナワトル語辞書に記録されているシウィトルの意味範疇がナワトル語話者全体に共有されていたかどうかは疑問である。とくにトルコ石は、メソアメリカ史上比較的新しい文化要素であり、権力者層に使用が限定されていた「高級品」であったため、同じナワトル語話者でも一般庶民には語義の一つとしては理解されていなかった可能性がある(Izeki 2007: 249-52)。一方、図像表現は、言語に関わらずメソアメリカ美術様式全体がソースとなりえる。図像を管理していたのはやはりエリート層であるが、図像モチーフは形態・色・意味・機能が問題となるので、言語ほど既存のカテゴリーや先行する文化における使用法には左右されない。そのため図像を管理するグループの任意性や融通性が高くなり、より直接的にエリート層のシウィトルに対する意図的な意

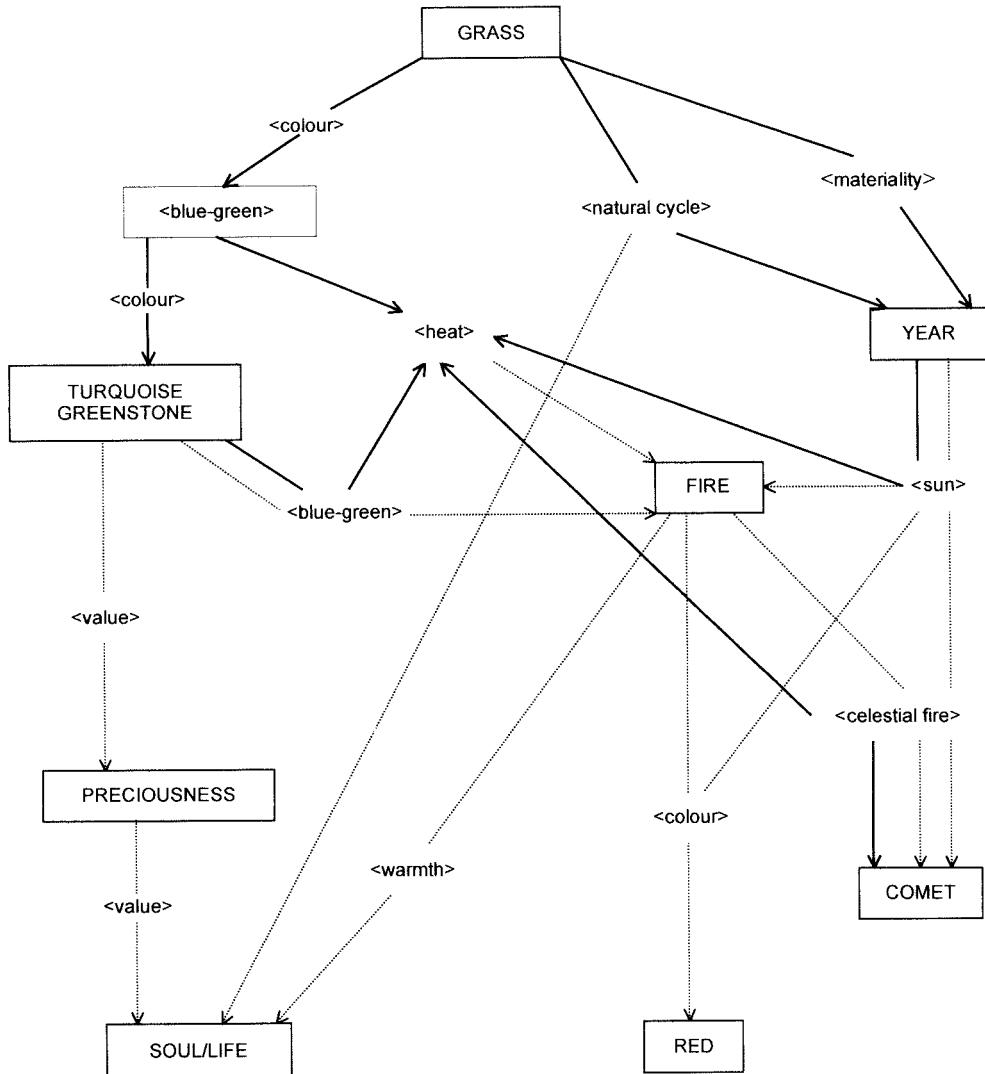


図3 シウィトルの語義カテゴリー

四角で囲まれた語は語義、<>内の語は語義の延長を媒介している属性を示す。矢印は意味の延長の方向、太線は基本的な語義の関係性を表す。

味付けを観察することができる (Izeki 2007: 153–5) (図4)。

トルコ石はシウィトル観念の物質的側面を表現している。次の章でも説明しているように、トルコ石は後古典期の中央高原で大量に消費された鉱石であるが、鉱山がサウスウエスト文化圏にあることや、メソアメリカ古来の青い石であるヒスイと対比されていたことから、背景となる地理、歴史、文化が言語や図像よりもはるかに広い。本稿では、テンプロ・マヨール出土のトルコ石にどのような象徴性が付与されていたか、そしてその象徴性がどのようにシウィトルの觀念化

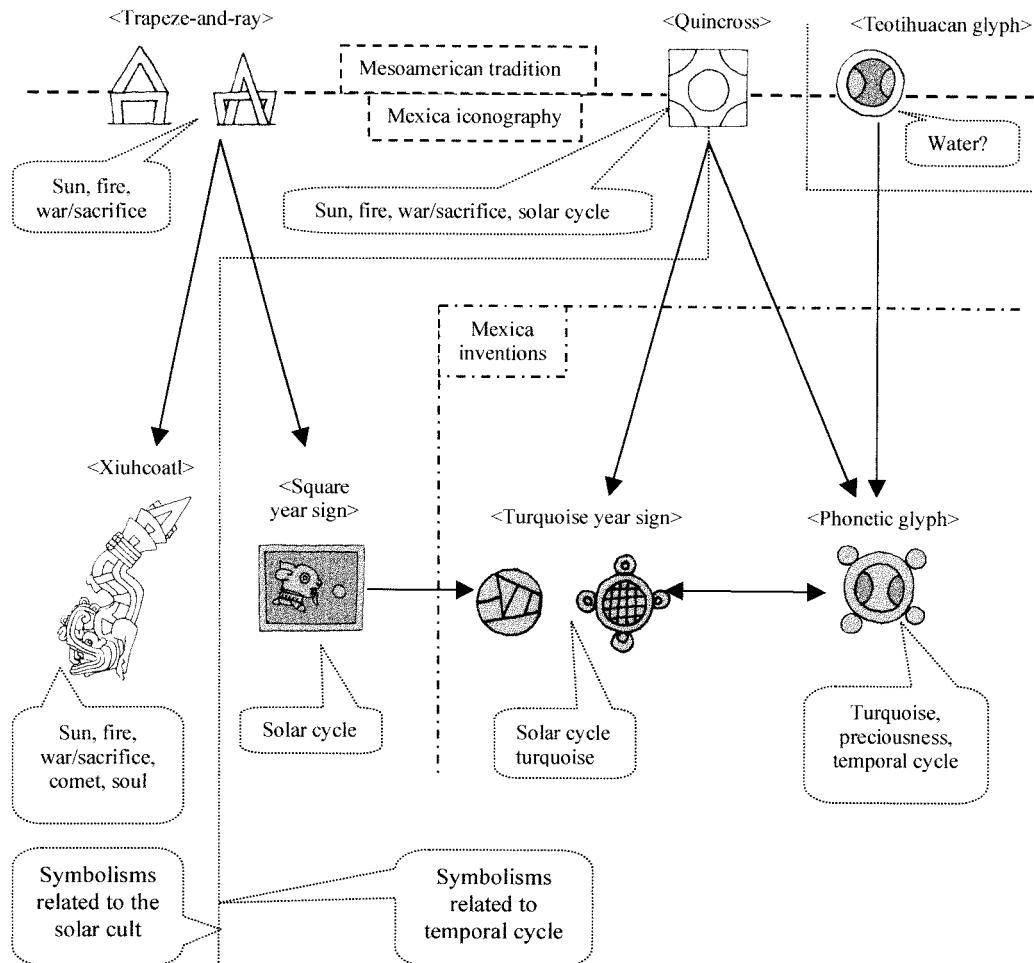


図4 シウイトルの図像カテゴリー

矢印は図像モチーフの形態と意味が変容していく方向を表す。

に関連していたかについて、後古典期メシーカ文化におけるメソアメリカ・サウスウエスト文化史の経験と表現という視点から解釈・考察をしていく。

3. メソアメリカにおけるトルコ石

メソアメリカ文化圏は、現在のメキシコ合衆国の南部地域2/3ほどとエルサルバドル、コスタリカの一部までを含む（図1）。しかしトルコ石の鉱山は、メソアメリカ文化圏内には存在せず、サウスウエスト文化圏に含まれる現在のアリゾナ州、ニューメキシコ州に集中しており、メキシコ中央高原へはかなりの長距離交易を経て輸入されていた。この北部との長距離交易網は、アステカ帝国成立以前の後古典期前期に中央高原で栄えた、トルテカ＝チチメカ族によって確立され

たと考えられている(Diehl 1983: 154)。トルテカ族も北部から移動してきた民族で、中央高原の定住民であったオトミ、ワステカ、ノノアルカ族などを征服し、そこから古典期までのメソアメリカ文化を吸収し、都市文明を発達させた。トルテカの首都であるトゥーラは、現在のメキシコ・シティの北東90キロ程に位置し、ナワ民族にとっては伝説の都、伝説の文明であったと文献資料などに記録されている(cf. Sahagún 1953-81: Bk 3, 13-5)。アステカ帝国を築いたメシーカ族を含むナワ民族の諸部族は、トルテカ族の末裔との政略結婚を介して、その伝統の継承権をこそって主張しようとした(Heyden 2000)。

メソアメリカにおけるトルコ石の使用量も、トルテカによって確立されたこの北部交易網の発展とともに急激に増加した(Harbottle & Weigand 1992, Weigand 1997)(図5)。まず古典期後半に、メキシコ北部でトルコ石の加工法(モザイク化)が考案され、それが鉱山のあるサウスウエストに伝わり、そこで地元での消費を目的に、大量にトルコ石のモザイク製品が生産されるようになった。その後アステカ帝国の出現とともに、サウスウエストはもっぱら鉱石の発掘地・輸出地として活躍するようになり、後古典期後期のトルコ石の実際の消費はメキシコ中央高原を中心となつた。中央高原より南部に位置するオアハカ地方は、アステカ帝国の支配下におかれ、貢納品としてトルコ石を輸入・加工・製品化していた職人の地域であったため、トルコ石製品を多く出土している。後古典期のメキシコ西部には、アステカ帝国に対抗するタラスコ族による独特的な文化が栄えていたが、アステカの北部との交易網の中継地点に位置していたため、必然的にトルコ石も流入してきた地域である。職人の地オアハカと、貢納品の集中する首都のある中央高原以外から出土したトルコ石製品は、モザイク技術、デザイン、完成度において明らかに劣っていた。

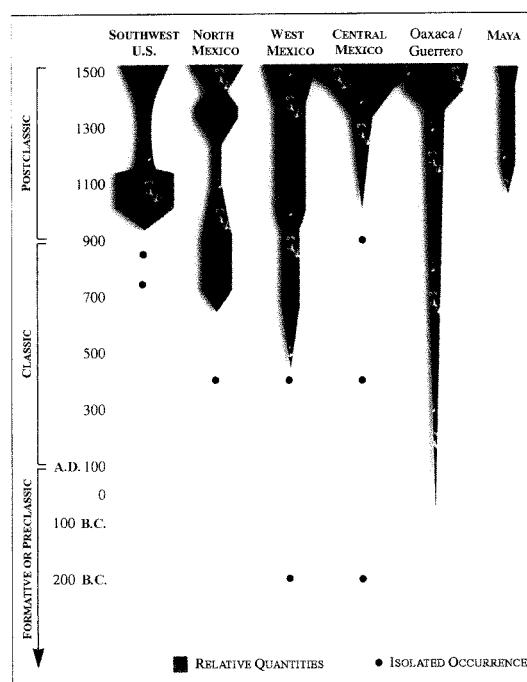


図5 地域別トルコ石の使用量の変化
(Harbottle & Weigand 1992: 59) より引用

また南部のマヤ地域は、より遠隔地に位置していたこともあり、トルコ石や加工品はほとんど出土していない。数少ないトルコ石製造物も、中央高原の美術様式で表現されたものがほとんどで、同時代の中央高原から搬入されたことがうかがえる。

伝統的にメソアメリカにおいて青や緑の石は非常に珍重されていたが、先古典期以降の政治・宗教的に重要な遺跡で頻繁に出土する青い石は、主にヒスイであった。ヒスイは、グアテマラなどに鉱山があり交易網を介しての獲得が比較的容易だったため、メソアメリカ史を通して、広範囲に渡る多くの都市でさまざまな形で使用されていた。一方、同様に青い貴重な石とみなされていたトルコ石は、後古典期後期の中央高原から集中的に出土している。しかし数量的には、歴史の長いヒスイに比べると極端に少ない。そのため、ヨーロッパやアメリカの美術館・博物館に所蔵さ

れカタログ化されたもの以外で、メソアメリカの各遺跡から出土したトルコ石は、現在のところ個別にカタログ化されたり研究されてはいないのが現状である。トルコ石自体の研究は、出土した遺物の化学分析と鉱山の特定がメインテーマで、そのデータは古代交易網の再構築などに活用されるのみである。そのような研究をしているアメリカ人研究者ウェイガンド（Weigand 1997: 27）は、先古典期から後古典期までの約1700年間におけるメソアメリカとサウスウエストの遺跡から出土したトルコ石の破片の数を、合わせて百万ピース以上と報告している。しかしそのうちの半数近くは、鉱山があるサウスウエストとメキシコ北部から出土したものである。トルコ石は比較的加工のしやすい鉱石のため、モザイクやビーズとしての使用が主であったが、例えば、後古典期中央高原出土の木製の盾におよそ1万4千ピースのトルコ石のモザイクが使用されているという記録もあることから、報告された百万ピースという数で多くのモザイク製品が構成されていたとは考えにくい（cf. Saville 1922: 72）。筆者の調査では、実際に数えられる形で出土または記録されているトルコ石遺物は、メソアメリカ全体でも400点あまりとなっている（表1）。そのうち保存状態の良いモザイク製品のほとんどは、スペイン人が征服期に略奪してヨーロッパに送ったもので、現在はヨーロッパやアメリカの美術館・博物館に所蔵されており、遺物の入手経緯や生産地などのコンテクストは不明である場合が多い。

収集したトルコ石製遺物のデータは、まずビーズとモザイクに大きく二分し、モザイク製品はさらに13種類のオブジェクト・タイプに分類した（表1）。この表から分かるように、テンプロ・マヨールを除外したメソアメリカ諸地域出土のモザイク製品のタイプには大きな特徴がある。具体的には、モザイク製品の半数はサポテカ＝ミシュテカ地域（オアハカ地方に相当）の洞窟やエリート層の墳墓から出土し、おもな形態はマスク（仮面）と円形の盾となっている。多くの洞窟には、宗教儀礼を執り行う場所という機能の他に埋葬地としての役割があり、コンテクスト的には墳墓との共通点がある。死者に捧げられたトルコ石のモザイクで装飾されたマスクは、後古典期以前のサポテカやマヤなどのメソアメリカ諸文化で使用された、死者の口に入れられたヒスイの石片や死者の顔を覆うヒスイのマスクと比較できるだろう。伝統的にヒスイはあの世での生命的象徴として死者に捧げられた（Garber, et al. 1993: 228; Flannery & Marcus 2003: 55）。後古典期のサポテカ＝ミシュテカ地域では、貢納品を製作し納めるという理由からトルコ石にアクセスするチャンスが多かったため、伝統的なヒスイの「生命」に関連するシンボリズムが新しい素材であるトルコ石に付与された可能性がある（Izeki 2007: 198–9）。また、円形の盾に関しては、マスクとは異なる伝統文化のルーツが見られる。メソアメリカにおいて盾の形が方形から円形に変化したのは後古典期以降と考えられており（Hassig 2001: 810）、円形の盾にトルコ石のモザイクが使用されるというのはまさに後古典期の産物といえる。この背景には、古典期後期から顕著になった戦闘的な太陽信仰の強調と、メソアメリカで伝統的に空と水の青を表現していたヒスイと並行して、サウスウエストで伝統的に同じ2つのシンボリズムを有していたトルコ石が導入されたことが考えられる。多くの円形のトルコ石の盾には、太陽光などの太陽に関連したモチーフが描写され、盾自体が太陽そのものを象徴し、太陽神に捧げる生贋を獲得するための戦闘をも象徴していた（Izeki 2007: 210–1）。太陽を象ったトルコ石の盾は、洞窟での宗教儀礼に使用されたり、エリートの権力の象徴として副葬品とされたと考えられる。このように、それぞれのオブジェクト・タイプには特有の背景や伝統文化の消費形態があり、それらの伝統の消費と拡大が総体と

なってトルコ石の意味と機能のカテゴリーを確立していったのである。

4. テンプロ・マヨール出土のトルコ石製遺物

後古典期後期のサボテカ＝ミシュテカ地域は政治的にも文化的にもナワ（アステカ）文化の影響下にあったので、トルコ石のシンボリズムにおいてもメシーカと共有している要素が多い。しかしテンプロ・マヨール各所に埋められたオフレンダ（神々への捧げものを貯蔵した穴や石製の箱）から出土した遺物からは、メシーカに特有のトルコ石への意味付けが観察できる。以下に、テンプロ・マヨールの神殿としての特徴、発掘史、オフレンダの説明、出土しているトルコ石製遺物のコンテクストと象徴性についてまとめていく。

テンプロ・マヨールは、頂上に二つの神殿があることから双子神殿と呼ばれている。ピラミッド自体は西向きで、北側に雨の神トラロック、南側に戦いの神であり太陽の化身でもあるメシーカの部族神ウイツィロボチトリが祀られている。それぞれの神殿の前では、それぞれの神に捧げられた儀礼が日々行われていた。メシーカ人の世界觀は、太陽崇拜が中心となっており、メシーカ人の使命は太陽に活力を与えるために生贊の心臓を捧げ続けることとされ、その生贊を確保するための戦いが、実際には政治・経済的な勢力拡大とも結びついていた。

テンプロ・マヨール神殿は、アステカ帝国時代に数回拡張されており、現在のところ7つのステージが確認されているが、実際には表層部の新しいステージほどスペイン人による破壊の影響を受けており、すべてのステージで平等に発掘調査されているわけではない。遺物が最も多く出土しているのは、アステカ帝国拡大期に相当するステージ4（1440～1481年）となっている。補完的な資料として使用されるものに、植民地時代にナワトル語やスペイン語で記録された文献史料がある。これらは多くの場合、生き残った支配者・貴族層の子孫が記述したもの、またはスペイン人が彼らから情報収集して編集した内容になっている。そのため考古学的にも歴史学的にも、アステカ文化分析は、首都を中心とした支配者層（おもにメシーカ人）の視点に集中してしまいがちであることをここに改めて補足しておきたい。

テンプロ・マヨールからの出土遺物で、考古学的に記録されているものは、1978年から始まったこの神殿周辺とオフレンダの発掘が唯一であると言っても過言ではない。オフレンダからの出土遺物はテンプロ・マヨール博物館の倉庫に保管され、ごく初期の調査を除いて、すべての発掘の記録が文書、写真、図面として残されており、ここ数年で、ほとんどすべてのデータがデジタル化されている。メソアメリカのトルコ石遺物に関しては、実物とそのコンテクストが詳細に調査できる唯一の資料といえる。2007年夏の時点で発掘済みのオフレンダは合計150あったが、そのうちの13個（No. 108-120）はまだ遺物の記録が終了しておらず、記録されている137のうち19のオフレンダから合計165点のトルコ石製遺物が発見されている（表1）。

オフレンダは、異なる時期に異なる目的で作られており、それらの時期と目的によっていくつかのグループに分けられている（López Luján 2005）。例えば、神殿の拡張記念に埋められたグループ、旱魃時に雨乞いのために作られたグループなどである。それぞれのオフレンダは、1～6レベルの層になっていて、多層構成のものは、一番下に水の世界をイメージした海の砂で構成された層があり、上層になるにつれて徐々に地的な性格が強くなり、最も構成物の多い一番上の

層には、動物や人間の骨や神々の像が並べられている。メソアメリカ各地の産物や動植物、美術品などがふんだんに取り込まれたオフレンダは、アステカ帝国の勢力拡大の過程を反映しているともいえる。

トルコ石が含まれていたオフレンダは19個あり、割合的にはオフレンダ全体の14%である（1, 2, 3, 5, 6, 11, 13, 17, 20, 37, 48, 60, 77, 98, 99, C3, CA, K, V）（図6）。ほとんどステージ4に相当する層に埋められたもので、1, 6, 11, 13, 17, 20, 60は同時期の神殿拡張工事記念、48は雨乞いの儀礼、37は統治者の遺骨の骨壺、77は不明、C3は出入り可能な石室（チャンバー）になっている。ま

た、テンプロ・マヨール神殿の外になるが、高位の戦士の儀礼センターと考えられている「ワシの戦士の家 *Casa de las Aguilas*」からも少量のトルコ石の破片が出土している（López Luján, et al. 2000）。

トルコ石はほとんどが土台が朽ちてしまったモザイク片か破片であるが、トルコ石を含むオフレンダにはあきらかな傾向がある。すなわち19個中15個は中心よりウイツィロボチトリ側に集中しており、戦いの神・太陽の神との強い結びつきをうかがわせる。戦闘が直接太陽に捧げる生贊の捕獲を意味することを考慮すれば、戦士の儀礼センターも太陽信仰と深く関わりがあるといえる。特徴的なのは、トルコ石が含まれているオフレンダには、生贊の象徴である人間の頭蓋骨や、生贊の儀式で使用されるフリントナイフが多く伴っていることである。その反面、水の神トラロックに捧げたオフレンダに常に含まれる、豊じょうの女神の形をした土器や大量の珊瑚、そして水の象徴である大量のヒスイはトルコ石とは一緒にされていない。

表1を見れば明らかであるが、メシーカに特有のオブジェクト・タイプは、フリントナイフと小ディスク（木製の円盤型オブジェクト）である。フリントナイフに付着して出土している場合、モザイクは、ナイフに表現された横向きの顔の眉の部分を構成しているか、または装飾の無いナイフにランダムに散りばめられている。擬人化されたナイフは実際の生贊の儀式で使用されたという記録もあるが（Sahagún 1953–81: Bk 7, 28）、ランダムに付着したモザイクや、フリントナイフの周辺で多く見られるトルコ石片の存在も併せて考慮すると、メシーカ特有の「トルコ石=ヒスイのような貴重な液体としての性質&生贊の象徴=血液」といった太陽信仰におけるシンボリズムの拡張も考えられる（Izeki 2007: 246–8）。また木製の土台にトルコ石のモザイク装飾をした小ディスク（c.1.5–5cm）は、その多くが頭蓋骨やフリントナイフ周辺から出土している。ここから推測できることは、前述した「青い石=生命」と「青い円盤=太陽」というシンボリズムのトルコ石への付与である。メシーカの場合は、死者の口に入れるあの世での生命の象徴と、太陽

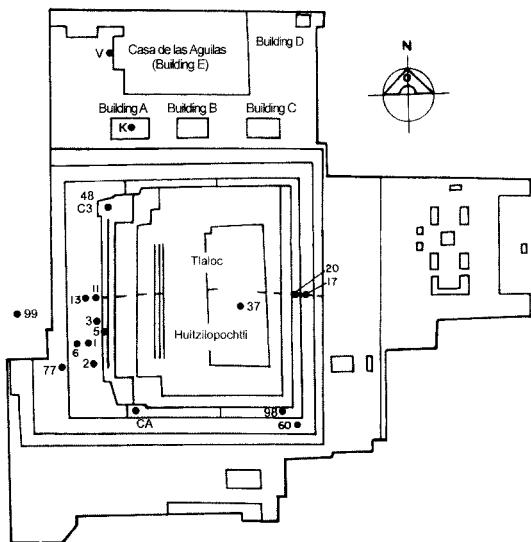


図6 トルコ石を含むオフレンダの位置

信仰に関連する生贊の觀念（頭蓋骨やナイフ）が強調されていると考えられる（Izeki 2007: 245–6）。

トラロック側から出土している数少ないトルコ石モザイク製品も、太陽を象徴した円形の盾や、太陽神の化身である火のヘビシウコアトルをかたどったナイフなど、雨乞いの儀礼のなかでも太陽に関連する儀礼用具として製作されたことがうかがえる。

5. 分析と解釈

このように、主神殿でオフレンダを管理していたメシーカのエリート層に見られるトルコ石のシンボリズムは、同時代のサポテカ＝ミシュテカ地域と同様に太陽信仰や戦闘に関連しており、ことに生贊の觀念とより強く結びついていることが分析できる。生贊は、後古典期に太陽信仰を共有していたメソアメリカ諸文化のなかでも、メシーカがもっとも強調した儀礼である。トルコ石がメシーカのコンテクストにおいて独特の意味の拡張をしていった背景には次の3点が考えられるだろう（Izeki 2007: 248–9）。第1に、トルコ石が比較的新しい物質で広いコンテクストで伝統的に確立した意味や機能がまだ無かったこと。第2に、トルコ石の交易ルートを確立し、戦闘的な太陽信仰を特徴としていた、北部出身のトルテカ文化の継承を表現する物質として象徴的であったこと。そして第3に、神話・伝説上のメシーカのルーツとトルコ石のルーツがともに北部であり、南部に鉱山のある伝統的なヒスイと空間的に対比できることである。つまり、メソアメリカ文化史において、メシーカが継承権を主張しながらも伝統文化に対する自己差別化を図るために、トルコ石は格好の媒体となったと考えられる。

しかしメシーカ人が目指した、「ヒスイ＝水」に対する「トルコ石＝太陽（火）＝シウイトル」というシンボリズムの分割化は、結局ナワトル語話者の間でも広く認知された觀念とはならなかったようである。ヒスイとトルコ石のシンボリズムと使用法の混乱は、ナワトル語の文章表現においてヒスイを意味するチャルチウイトル（*chalchihuitl*）とトルコ石を意味するシウイトルが重複して使用されていることからもうかがえる（Izeki 2007: 249–52）（図7）。例えば、ナワ民族でありながらアステカ帝国下に属さなかった中央高原のトラスカラ人は、植民地時代初期にスペイン人によって北部のトルコ石に類似する鉱石（マラカイト）の鉱山に労働力として送られた時、その鉱山を本来ヒスイという意味であるはずの「チャルチウイテ」と呼んでいたという記録がある（Weigand 1968: 50）。マラカイトは化学的・素材的にトルコ石に類似した鉱石で、メソアメリカでは「トルコ石的鉱石」として珍重されていたため、ナワトル語の語彙ではシウイトルのカテゴリーに分類されるべき鉱石である（Weigand, et al. 1977: 16; Pellatt 1992: 105, 124）。このようにトルコ石＝シウイトルという觀念は、すでにシウイトルに含まれていた語義である「太陽年」や「火」といった觀念と関連づけるために、後古典期後期のメシーカ人支配者層という限られた人々によって導入されたもので、スペイン人到来時には未だに觀念化の途中であったことが考察できる。

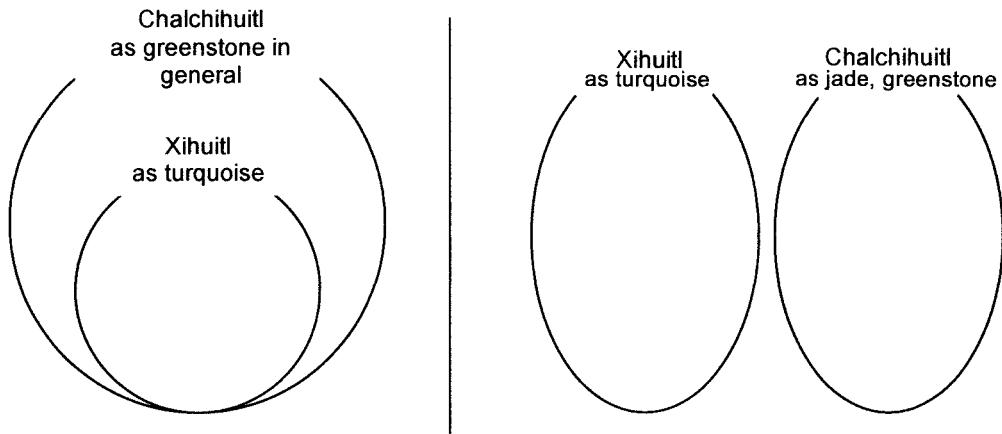


図7 シウイトルとチャルチウイトルの語義カテゴリー

左：トルコ石がチャルチウイトルに含まれている場合
右：シウイトル＝トルコ石、チャルチウイトル＝ヒスイ・青い石を区別している場合
(メシーカが意図したカテゴリー)

参考文献

- Dakin, K.
- 2001 Nahuatl. In The Oxford Encyclopedia of Mesoamerican Cultures, edited by D. Carrasco, Vol. 2: 363–5. Oxford University Press, Oxford.
- Diehl, R.
- 1983 Tula. The Toltec Capital of Ancient Mexico. Thames & Hudson, London.
- Evans, S. T.
- 2008 Ancient Mexico & Central America. Archaeology and Culture History. (2nd. Edition) Thames & Hudson, London.
- Flannery, K. V., and J. Marcus
- 2003 The Growth of the Site Hierarchies in the Valley of Oaxaca: Part I. In The Cloud People. Divergent Evolution of the Zapotec and Mixtec Civilizations, edited by K. V. Flannery & J. Marcus, pp. 53–64. Percheron Press, New York.
- Garber, J. F., D. C. Grove, K. G. Hirth, and J. W. Hoopes
- 1993 Jade Use in Portions of Mexico and Central America. Olmec, Maya, Costa Rica, and Honduras-A Summary. In Precolumbian Jade. New Geological and Cultural Interpretations, edited by F. W. Lange, pp. 211–31. University of Utah Press, Salt Lake City.
- Harbottle, G., and P. Weigand
- 1992 Turquoise in Pre-Columbian America. Scientific American Vol. 266, No. 2: 56–62.
- Hassig, R.
- 2001 Weaponry. In Archaeology of Ancient Mexico and Central America. An Encyclopedia, edited by S. T. Evans and D. L. Webster, pp. 809–12. Garland, New York.
- Heyden, D.
- 2000 From Teotihuacan to Tenochtitlan. City Planning, Caves, and Streams of Red and Blue Waters. In Mesoamer-

- ica's Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs, edited by D. Carrasco, L. Jones, and S. Sessions, pp. 165–84. University Press of Colorado, Boulder.
- Izeki, M.
- 2007 Conceptualization of 'Xihuitl': History, Environment, and Cultural Dynamics in Postclassic Mexica Cognition. Unpublished Ph.D. thesis submitted to the Institute of Archaeology, University College London, London, U.K.
- López Luján, L.
- 2005 The Offerings of the Templo Mayor of Tenochtitlan, (Revised Edition) translated by B. R. Ortiz de Montellano and T. Ortiz de Montellano, University of New Mexico Press, Albuquerque.
- López Luján, L., H. Neff, and S. Sugiyama
- 2000 The 9-Xi Vase. A Classic Thin Orange Vessel Found at Tenochtitlan, translated by S. Sessions. In Mesoamerica's Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs, edited by D. Carrasco, L. Jones, and S. Sessions, pp. 219–49. University Press of Colorado, Boulder.
- Manrique Castañeda, L.
- 1995 Las lenguas prehispánicas en el mundo actual. Arqueología Mexicana. México Antiguo: Antología Vol. 1: 192 –9.
- Miller, M., and K. Taube
- 1993 The Gods and Symbols of Ancient Mexico and The Maya. Thames & Hudson, London.
- Molina, A.
- 1992 Vocabulario en Lengua Castellana y Mexicana y Mexicana y Castellana. Editorial Porrúa, Mexico.
- Pellant, C.
- 1992 Rocks and Minerals. Doring Kindersley Handbooks, London.
- Sahagún, B.
- 1953–81 Florentine Codex, translated by A. J. O. Anderson, and C. E. Dibble. Monographs of the School of American Research, Santa Fe.
- Saville, M. H.
- 1922 Turquoise Mosaic Art in Ancient Mexico. Contributions from the Museum of the American Indian, Heye Foundation, Vol. 6, Part 2. New York.
- Siméon, R.
- 1992 Diccionario de la Lengua Náhuatl o Mexicana. Siglo XXI, Mexico.
- Weigand, P.
- 1968 The Mines and Mining Techniques of Chalchihuites Culture. Ancient Antiquity Vol. 33, No. 1: 45–61.
- 1997 La turquesa. Arqueología Mexicana Vol. V, No. 27: 26–33.
- Weigand, P., G. Harbottle, and E. V. Sayre
- 1977 Turquoise Sources and Source Analysis: Mesoamerica and the Southwestern U.S.A. In Exchange Systems in Prehistory, edited by J. E. Ericsson, and T. K. Earle, pp. 15–34. Academic Press, New York.